

活動報告書
(財団ホームページ掲載用)

期 間：2020 年 1 月～3 月

学校名：大阪市立新箕中学校

研究課題 (申請書通りに記入)

アダプティブ・ラーニングを地盤とした 21 世紀スキルと ESD 教育の推進
～全生徒を全教員で見守り、自己実現を可能にする ICT と AI の効果的な活用～

成果目標 (研究活動の進捗にしたがって、できるだけ具体的に記入)

1. 単元テストによって、生徒は学び直しの機会やできないところにより焦点をあてて学習をすることができる。
2. 単元テストによって教師は教科の評価方法を改善する仕組みとなる。
3. 生徒は自らの課題に応じて必要な学習の手立てを考え、選択するようになる。教師も課題を明らかにし、コーチングの視点の向上につながる。
4. PBL 型学習の推進に伴い、生徒はもちろん、教師も探究的なストーリーを描きながら授業をつくる力が深まる。これにより、学校経営においても同様に、課題解決の視点をもった教員集団が形成される。
5. 生徒が望めば自主的に学ぶ仕組みを整えることで、与えられたことをこなす学習の習慣から、自ら考え、選択し、行動することができる自律した学習者へと変容する。
6. 取り組みによってどんな生徒を育成したいのかを明確にする。また評価の視点をつくり、学校全体で同様の方向性をもって学校運営を推進する。

本期間（1 月～3 月）の取り組み内容

＜校内的な取り組みについて＞

1. チーム学び方改善

①テスト校時の見直し

今年度は G20、天皇即位に伴う 10 連休と、授業時数確保に向けた取り組みとして、放課後にモジュールをつくり、50 分×6 限+25 分で単元テストを実施した。それに伴い、一部テスト勉強を当日に行う者が出てきた。もちろん学習の調整として空き時間等を活用することは推奨するのだが、調整と言い難い場面も目にするようになり、仕組みの面で調整することが必要となった。そのため朝に単元テストを実施する校時に変更し、プレ実施した。次年度は朝実施で 45 分の授業実施を進めることとした。

活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

＜通常校時とテスト校時＞

	通常校時(50分)	テスト校時(45分)
予鈴	8:25	8:25
朝学活	8:30 ～ 8:35	8:30 ～ 8:35
テスト		8:35 ～ 9:00
1限	8:35 ～ 9:25	9:10 ～ 9:55
2限	9:35 ～ 10:25	10:05 ～ 10:50
3限	10:35 ～ 11:25	11:00 ～ 11:45
4限	11:35 ～ 12:25	11:55 ～ 12:40
給食	12:25 ～ 13:10	12:40 ～ 13:25
予鈴	13:10	13:25
5限	13:15 ～ 14:05	13:30 ～ 14:15
6限	14:15 ～ 15:05	14:25 ～ 15:10
終学活	15:05 ～ 15:30	15:10 ～ 15:35

②テストの分類

テストの種類と目的を再整理することとした。次年度へ向けてどのタイミングで何を目的としたテストを実施するのかを検討した。今年度の単元テストの月あたりの実施回数は6～7回程度となった。

＜年間のテスト実施まとめ＞

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
単元テスト	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
外部テスト			①②③					①②		③		
国・府調査	③全国					③チ	③市統			①②チ		
校内実力	①②		*			①②③		③	③	*		

全国：全国学力学習状況調査 チ：府チャレンジテスト

市統：市統一テスト

外部テスト：五ツ木書房

*：外部テストを3年生の校内実力テストに兼ねる

③パフォーマンス評価の導入

評価に対するフィードバックの根本的な仕組みだけを変えても、実際に身につけたい資質・能力を教科ごとに定義し、その育成を行わなければ意味がない。学んだ力をどのように活用し、その活用に対する評価をするための場面設定（課題設定）を行い、パフォーマンスを通じて評価することが大切だという見解となった。そこで2月27日に逆向き設計に基づいたパフォーマンス課題の研究授業を実施し、評価と課題のあり方について研修を行った。



活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

2. チーム PBL

しんたつサミット（1・2年合同学習発表会）を実施した。新型コロナウイルスの影響で来校予定であった地域関係者、区民、教育関係者、計約80名以上の参加はなかったものの、学年を越えて相互に発表し、生野区の魅力について、また生野区をよりよくするための提言を発表し議論しあった。3年生も参加予定であったがインフルエンザの蔓延により、同会場での参加ができなかった。そのため、zoom で会場と教室を繋いだ。サテライト会場では16名の参加があった。

また、大阪府庁へ万博や未来の大阪への提言、区役所との連携等の取り組みもあり、地域・社会へ参画するための取り組みの中で学ぶことができた。区長直々にビデオレターもいただき、地域をよりよくしたいという学びに火をつけることができた。

＜3年生とつながるサミット＞

＜府庁提言プロジェクト＞

＜リゲッタさん協力のスリッパ＞



3. チームインフラ

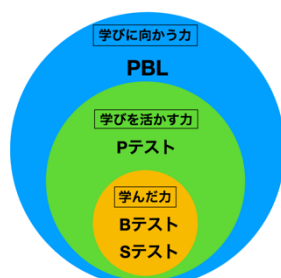
- ①リアテンドント導入に向けて大阪市立大和川中学校へ視察を行った。
- ②コロナ対応に伴う Chromebook 無料整備を推進中である。

アドバイザーの助言と助言への対応

12月から計3回程度寺嶋先生の研究室へ伺い、これからの方向性に向けて整理をした。特に取り組みの多い本校の実践に対して整理と焦点化を図っていただいた。その上で今期にいただいたアドバイスは大きく次の2点である。

- 1) パフォーマンス評価を実施するための逆引き設計の授業づくり提案
- 2) 教科指導が本丸であるにも関わらず、授業づくり推進の視点に欠けている点

これらの助言に対し、今期は「パフォーマンス課題とは？」を校内全体が理解することを目的として、2月20日（木）に寺嶋先生に來校いただき、「思考・判断・表現力（学びを活かす力）の育成について」研修会を実施し、形成的評価や総括的評価といった評価のタイミングやその目的の違いについてご指導いただいた。それを元に次年度各教科で単元や領域でパフォーマンス課題を設定し、教科の目指す生徒像への見取りを行う方向性が生まれた。



活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

本期間の裏話 (うれしかったこと、苦心談など)

- ・新型コロナウイルスにより、校内の行事においては大打撃を受けた。1・2年の学習発表会、中国交流、卒業式という学年ごとの一番の主幹行事に入場制限がかかったことである。今年全学年が初めてプロジェクト学習の実践をし、同じ苦労を共にした経緯があるので、本来であれば、その分交流することの価値は高く、これからの学校を大きく発展させる行事となっていたはずである。この停滞した1ヶ月を抱えて次年度へ進まなければならない。しかしながら、学習発表会は **zoom** で場所をつなぎ、わずかではあるが交流できた部分もある。中国交流はできなかったものの、株式会社リゲッタさんにご協力いただき、地域の文化に触れる体験をすることができた。卒業式では、**YouTube** で式の所作や動きを映像で予習し、当日は練習時間60分という中で、互いに伝達しながら練習を進めることができた。失われた2週間は映像で時をつなぎ、保護者へは開式前に映像で感謝のメッセージを伝え、入場制限がかかった会場は **Live** 配信で100名を超える親族、在校生とつながることができた。多くの学生たちが落胆したであろう2月末。しかし、主体的な学びは世界を変える。そう感じさせてくれた中学生がいたことを伝えずにはいられない思いでいる。プロジェクト学習における学びの質を再確認するとともに、それに掛け合わせて **ICT** の本質的な利用が学びを加速させることを目の当たりにした。新しいことを進めることはエネルギーがいる。しかし、それを実行できるだけの生徒と教師の有機的な関わりができたことを確認することができた。
- ・臨時休校に伴い、「逆境を味方に」を合言葉に以下の研修等を実施した。
 - ①**zoom** 研修会の実施
 - ②**Google for education** 研修会の実施
 - ③**Slack** 研修会の実施
 - ③評価に関する研修会
 - ④**high-tech-high** の **PBL** の取り組み研修会
 - ⑤**YouTube** における反転授業（卒業式予習動画の配信）
 - ⑥**YouTube** の **Live** 配信（**zoom**）機能の導入



これらのことができたのも、会うことが制限される中で何ができるかという問いに向き合う学校の土壌があるからだと感じている。参加者は前向きで、逆境は時に人を育てるということを実感することができた。

- ・年末にかけて、総合的な学習の時間のあり方、**PBL** 学習を今後ずっと進めるのか、モジュールの実施を続けるのか、職員の打ち合わせ時間をどうするのか、単元テストのルールをどうするのか、情報共有のあり方をどうするのか、今まで進めてきたことに対して

活動報告書 (財団ホームページ掲載用)

一度立ち止まり、見直す時間が設けられた。一定整理され次年度へ進むが、このような議論を進める上で障壁となるものを感じた。それは会議の進め方やあり方である。従来の職員会議は多数決制度で議長等の進行の元、決定してきた。今は学校長の一存で決定する仕組みである。それならばその仕組みに合わせて、会議の目的や方法、メンバーの精選等を検討し、広く意見を出しながら合意形成を図るものにしていくことが必要であると感じた。例えば「教務部になると、生活指導部への意見は専門ではないからできない」や「職員会議の前に主幹メンバーで一度議論をしている内容を、若手が職員会議で意見することなんて無理だ」など、このように捉えている教師や、学校の風潮があることも事実なのではないだろうか。部等を設定し、それぞれが責任を持って進めていくことのメリットももちろんあるが、学校としての最上位の目的がないと、それぞれのセクトで違う方向に行きかねないし、意見を出しづらい環境であることも見受けられた。さらなる組織改善の工夫も必要であることを強く実感した。

本期間の成果

- ・アナログな仕組み整備についてある一定整理することができた。
- ・逆向き設計の授業づくりに対して全教員が見通しを持つことができた。

今後の課題

- ・チーム学び方改善
 - 到達度評価に即した学校の教育課程、評価システムの構築
- ・チーム PBL（授業づくり含む）
 - 問いのつくり方（逆向き設計に基づいた問いの立て方）の推進。
 - 効率的な学びにするためのカリキュラム・マネジメント
- ・チームインフラ
 - 本校の取り組みに適した ICT 機器の整備を本格実施すること。

今後の計画

1. 評価の目的を再整理し、目的にそって効果的かつ効率的な評価方法を確立する
 - 1) 評価の最上位の目的を現状を共有し、適切なタイミングで適切にフィードバックし、**学習者に次への見通しを持たせることとする。**
 - 2) それに伴い、2週間に1回程度の頻度で5教科のペーパーテストを実施する。
 - 3) テストの種類を P テスト、S テスト、B テストの3つに分類し、評価すべき能力に最も適した方法で評価する。
 - ①**B テスト (BASIC KNOWLEDGE TEST)** * 知識技能・思考表現判断等のテスト
単答選択式・並べ替え・計算技能、思考表現判断等の紙面上で問うことが可能な能力全般を評価するいわゆるペーパーテストのこと。単元や領域等をさらに細かく分割しショートスパンで実施することで、到達度を生徒教師双方向で認識し、

活動報告書
(財団ホームページ掲載用)

学び直しの手立てをフィードバックする。

5 科：2 週間に 1 回程度の実施 4 科：学期末に 1 回程度の実施

②**S テスト (SKILL TEST)** *技能ベースのテスト

実験器具や刃物、火器類といった制作道具の使用技術、英語科のスピーキング等の技能が身についているかを問う**実技系の技能テスト**のこと。主に授業内で実施し、その能力を評価し、フィードバックする。

③**P テスト (PERFORMANCE TEST)** *パフォーマンス課題

単元目標を達成しているかを逆向き設計に基いて場面・課題設定をし、**課題解決に向けた活動**のプロセス内で評価する。主に授業内で実施し、ルーブリックを提示することで、生徒に求める達成度を可視化してフィードバックする。

2. PBL 学習により「資質・能力」と「主体的に学ぼうとする態度」を育成する

1) 主体的に学ぼうとする態度と資質・能力

- ①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに粘り強く取り組もうとする姿
- ②粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする姿
- ③自身の感情の起伏をコントロールする姿
- ④メタ認知力

これらを踏まえ、学校としての求める生徒像の構築を図る。

3. 1、2を推進する上での効果的、効率的な ICT 機器の導入

- ・B テストの効果的、効率的な実施に向け DNP リアテンダントの導入（採点業務簡略化）
- ・P、S テストの学習効果を高めるためのタブレットとネット環境の導入
(クリエイティビティと全ての個に応じた学習展開を推進するためのツール)

1 年間を振り返って、成果・感想・次年度への思い

相対評価の平等性を担保するため、今までは同一のテストを同時時間帯に実施し、そのテスト結果や明確な成果物を数値化し、序列をつくることで評価することが一般的であった。絶対評価へと評価の価値観が大きく転換されたにも関わらず、慣例的に同様の資料を元に、同様の評価材料で序列に基づいた評価をしているところも多かったのではないだろうか。相対評価であれば生徒たちがどのような到達度であろうと順位がつく。そのため授業者も「生徒たちにどのような力を身につけ、どんなスキルをもって社会参画すれば良いのか？」という問いに向き合わなくても授業を行うことが仕組みとしてできた。形骸化された評価方法から脱却を図らなければ、生徒の資質・能力の育成に向き合うことが難しいことがわかってきた。

活動報告書

(財団ホームページ掲載用)

単元テストに変更することで、何のためにやるのか、評価とは何か、どんな力を身につけることが求められているのか、これらについて学校全体が否が応でも向き合わざるを得ない環境が生まれた。**絶対評価で成長を促し、相対的な位置も添えてあげる**。入試の制度も大きな変更がない今の学校現場では、これくらいの感覚の中で仕組みを整理するのが良いのではないかと考えるようになった。

次年度へ向けて見えてきたことが2つある。1つは、生徒・教職員すべての人が変化の中に身を置き、常に学び続けることができる仕組みを整えること。もうひとつはこれらの仕組みにICTをいかに結びつけるかということ。正直、ICTに特化した取り組みについて大きく進んでいないのが本校の現状である。それでも生徒たちは確かな学びから非認知的スキルの向上はもちろん、相対的な得点力まで大きく向上した。(3年生は市平均程度、2年生は府平均を大きく上回る) もちろん経年変化で比較した時の結果である。ICTがふんだんに活用されていなくてもできる教師の改革はあるということである。しかし、生徒たちは間違いなくICT機器があるおかげで自分たちの表現の幅を広げ、コミュニケーションを活性化し、学びを深めてきた。これは大人も同様なのではないかと感じる。本校は「ICTがあつた方が今の課題を乗り越えるのに最適だ。」全員がそう感じることをできるだけだけの仕組み、整備、考え方の変容をこの一年で整えることができたと捉えている。次年度、さらなる躍進に向けて、生徒と共に走っていききたい。

最後に、この1年に限らず、プロジェクト学習を進めることで実にたくさんの外部の方々にお世話になってきた。そんなつながりの中、学校改善を図ることができたことに感謝申し上げたい。コロナウイルスの影響ですら前向きに捉え、巣立っていった3年生がいる。未知の状況にもその場に応じて対応できるたくましい在校生がいる。このような生徒たちのこれからを、ともに育てて行ければ学校としてこの上ない幸せである。